

通信小海

リサイクル運動と失業問題

牧師 水草修治

「毎度おなじみのチリ紙交換車でございます。ご家庭でご不用になった、古新聞、ぼろぎれ、空き缶などをトレットペーパー、ティッシュと交換させていただきます。」二十年ほど前は盛んに「つついっつトラックが走っていたものだ。車を呼びとめて古新聞や空き缶を出すと、ティッシュやチリ紙と交換してもらえたし、回収業者はそれを製紙工場に持ち込んで金がもらえて生活できた。そして、工場は紙の材料として古紙を入手できた。」

「今月のみことば」
「あなたの隣人を自分自身のおうに愛せよ。」
マルコ福音書十二章三十一節

「三方得」の理想的な仕組みがそこにあった。この仕組みは江戸時代からあったそうである。

ところが、何年か前からチリ紙交換車は来なくなつた。なぜか？古紙の価格が暴落して、商売にならなくなつてしまつたのである。なぜ暴落したのか？ポランティアのリサイクル運動が盛んになつて、古紙の回収率が上がりすぎて、古紙が供給過剰になつたからである。結果的に、古紙や空き缶の回収を仕事としていた多くの人たちは失業し、各家庭は古紙をチリ紙に交換してもらえないというメリットを失つて逆にお金と労働力を提供して古紙や空き缶を出さねばならなくなつてしまつた。空き缶回収で食べられなくなつた失業者たちは、不燃ゴミ回収日の早朝に空き缶抜きとりをして、一般住民から非難されて東京では社会問題化してテレビでも取り上げられる始末である。

日本同盟基督教団 小海キリスト教会 牧師 水草修治
会堂・牧師館 長野県南佐久郡小海町大字小海四三三五 二七
千三八四一一 二二 二六七九二四七七六
郵便振替 五三 六一六八三

見晴台の教会へどうぞ

(小海駅東の丘の上)

地図

集会あんない

日曜日 サンデースクール 午前八時半

朝礼拝 午前十時から十一時半

夕礼拝 午後七時半から八時半

水曜日 祈り会 午後一時半と午後七時半

* 八千穂・海尻・川上でも家庭集会あり。

* 個人的な聖書勉強や個人的なご相談にも乗ります。

誰しもよかれと思ってリサイクル活動にボランティアで加わっているし、学校教育でもリサイクル活動が強調されているのであるが、結果的に、百年以上も確立していた「三方得」の回収システムを壊して、人の職と食を奪ってしまったとしたら、これはたいへん残念なことではないだろうか。

筆者は図書館で借りた槌田敦『エゴロジ―神話の功罪』（ほたる出版）という本などによって、こうした状況を知った。この本は読者に推薦したいいへん興味深いものである。物事はその一部だけでなく、よくよく全体を見て行動しなければならぬのだと思ひ知らされることである。格別、行政の立場に立つ方たちには、そうした全体をまた長い目で見る知恵が必要なのだろう。こうしたことも教会の祈りの課題である。

「知恵を得ることは、黄金を得ることよりはるかにまさる。悟りを得ることは銀を得るよりも望ましい。」 箴言十六章十六節

福音指圧教室

日時三月二日(日)午後二時

場所教会堂 電話九二・四七七六

「来てみたい、来てみたいと思っていただけ、ともだちに誘われて今度きてみて、ほんとうによかった。」と東馬流のNさんがおっしゃいました。私もこのおかげで、昨年から今年にかけて恒例のぎっくり腰にならないですんでいます。

あなたもどうぞお気軽におこしください。

持ち物バスタオル、タオル、くつした

スポンできてください。

無料

米支援 感謝報告会

三月十四日(金)午後二時

場所小海キリスト教会会堂

報告者藤田寛さん

多くの方たちのご協力を得て、山谷を中心とする米支援をでき、多くの人がいのちをつなぐことができました。今回、感謝報告会で、どうぞご参加を。

連絡先

お米と調味料(しょうゆ・塩・だしのもと)、毛布を必要としています。大根・ニンジンなども助かります。

小海町役場 九二・二五二五

南牧村社会福祉協議会 九六・一三六三

山谷農場:116・0003 荒川区南千住4丁目4-1
ヤマト運輸(株)台東支店止め

藤田 寛 電話090・1436・6334

カンパ: 千振替 二四・四五三七九六

山谷農場

天国で一番偉い者

弟子たちがイエスのところに来て言った。「それでは、天の御国では、だれが一番偉いのでしょうか。」そこで、イエスは小さい子どもを呼び寄せ、彼らの真中に立たせて、言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも、悔い改めて子どもたちのようにならないかぎり、決して天の御国には、はいれません。だから、この子どものように、自分を低くする者が天の御国で一番偉い人です。」

マタイ福音書十八章一 四節

イエス様の弟子たちは、しばしば「だれが一番偉いのか?」と言って議論をしました。また、「イエス様がやがて王様になったら誰が左大臣になりだれが右大臣にな

るのか」と言い争いました。イエス様が十字架にかかって三日目に復活されるまで、弟子たちはイエス様の教えの真意を悟ることができなかつたのです。弟子たちは、イエス様が当時ユダヤを支配していたローマ総督を追い出して、エルサレムで王位につくものとはかり勝手に思いこんでいたのです。

こうした弟子たちにとっては、多くの人にかしずかれ、人をあこで使うような者こそが一番偉い者であり、人に仕える者はいやしい者であるという価値観を持っていました。弟子たちだけでなく、今日私たちが生きているおとな社会の価値観も似たようなものでしょう。葬式のあと多くの人が「牌寄せ」の席順争いで面子をきそっているのを見れば、一目瞭然ではありませんか。

「さあ、こつちにおいで。」とイエス様は小さな子どもを呼び寄せました。子どもはイエス様が大好きでした。さつと駆けてくるとイエス様を見上げてにこにこ顔です。イエス様は、この小さな子どもが弟子たちの先生だとおっしゃるのです。「(君たちは、自分が偉い者で、天国に入れて当然であり、そこで誰が一番の席に着くのかと争っているが、

それどころじゃない。悔い改めて子どもたちのようにならないかぎり、決して天国にはいることもおぼつかないよ。」

「子どものように自分を低くせよ」とイエス様はおっしゃいます。なんと言っても子どもは自分が小さな者であることを知っています。お父さんお母さんがいないと、自分は食べていくことも生きていくこともできないことをよく知っています。デパートでお父さんお母さんが見えなくなったら、アンアン泣き出すのが子どもです。子どもは自分の弱さをよく知っています。子どもには太陽が上ることも、息ができることも、じゃがいもをまいたらたくさんに増えることもみな不思議な神様の恵みです。

ところが、おとなは傲慢です。愚かなことに、自分の力で自分は生きているなどと思いがつています。実際には、太陽も、大地も、空気も、食べ物も、健康も、いのちそのものもみな神様の恵みなのに・・・。人は生かされてこそ生きているのです。自分の傲慢を悔い改めて「神様、ごめんなさい。私は思いあがっていました。」と申し上げましょう。たましいに平安が来ます。

＜幸福な家庭＞

失敗したスタート

ふりかえれば私自身の結婚生活のスタートは失敗だったなあと告白します。当時、私は牧師になって三年目で、しかも、

あるむずかしい勉強をするために週に二回は学校にかよって徹夜仕事は週二回か三回。それは多忙な毎日でした。伝道者というのは神様に二十四時間自分の人生をおささげしているという心意気で生きていますから、つい仕事にのめりこみます。当時、早朝から祈り、朝食、書齋で勉強、事務、訪問、来客、昼食、昼食が終わるとまた勉強、訪問・・・夕食、また書齋、家内と顔をあわせるのは食事のときだけなのですが、ほとんど話をするとまもなくくらいでした。

半年ほどたったある夕方、なぜかその日にかぎって一階から「晩御飯ですよ」とい

う声がかかりません。当時、私たちは六畳二間の二階家に住んでいて二階が書齋、一階の六畳が生活スペースでした。どうしたのかなと、階段を降りてみると薄暗くなった部屋の隅に家内がべたりと座りこんでしくしく泣いていました。「どうしたん？」と聞くと、しばらくして「わたしなんのために結婚したのかわからなくなつた。」と蚊のなくような声で言いました。

「いと高き神の使命に気高く生きる牧師である夫」は自分を振り返ってもくれない、自分はただご飯を作り、洗濯をし掃除をするためにのみ結婚したのかしらと家内は考えたようです。ひどい夫です。かわいそうなことをしました。一番身近にいる小さな者を愛することのできない者に、どうして人類など愛せるでしょうか。愛していると思ったら、それは幻想にすぎません。主イエスは「全人類を愛せよ」とはおっしゃらないで、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。」とおっしゃいました。

また次のようにもあります。「夫たち

よ。妻が女性であつて、自分よりも弱い器だということをおぼえて妻とともに生活し、いのちの恵みをもとに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。」(第一ペテロの手紙三章七節)

最後の一行は意味深長です。妻のごきげんばかり取つて、神様のみこころをないがしるにするような男はもちろん伝道者失格ですが、また、ぎやくに、神様は、妻をやさしくいたわり、尊敬しないような牧師の祈りには耳をかしてくださらないといふのです。天のお父様は「わたしのだいじな娘をないがしるにするような奴の祈りに聞いてやるものか。」とそっぽを向いてしまわれるのです。祈りを聞いてもらえないのでは、牧師としては致命傷です。

仕事中毒気味だった私は、少しずつ、ほんとうに少しずつですが、神様によって変えられてきました。がんばるより神様に委ねることを学んだのでしよう。そして、妻とともに生きることのしあわせを神様からの賜物として心味わうことができるようになりました。感謝しています。